# 達磨宗・仏地房覚晏『心根決疑章』訓註（上）

館　隆志
吉村　誠
師茂樹
山口弘江
柳幹康

## はじめに

本論は、二〇一八年に発見された達磨宗の新出史料である仏地房覚晏（生没年不詳）『心根決疑章』の訓註であり、『心根決疑章』を詳細に読解することにより、これまで長らく不明であった日本中世初期の禅宗の受容と展開を明らかにしようとするものである。

達磨宗は、鎌倉時代の大日房能忍（生没年不詳）を開祖とし、日本禅宗の先駆となった極めて重要な禅宗の一派である。能忍に関連して達磨宗の名が史料に初めて見えるのは、『百練抄』建久五年（一一九四）七月五日条の「入唐上人栄西、在京上人能忍等、令建立達磨宗之由風聞。可被停止之旨、天台宗僧徒奏聞云々、可従停止之趣被宣下云々」という記事である。これによれば、能忍が栄西（一一四一～一二一五）とともに京都で「達磨宗」を「建立」することを停止させられたという。

ここに、「在京上人能忍」とあるのは能忍に関する極めて重要な情報である。「入唐上人栄西」とは異なり能忍は入宋経験がなかった。その布教は建久五年よりかなり前から始まっていたことになる。能忍について具体的なことはほとんど解らないが、『元亨釈書』栄西伝（一三二二年成立）には、「己酉歳有能忍者。聞宋国宗門盛、遣其徒附舶扣問育王仏照光禅師。照憐異域之

信種、慰誘甚切。寄以法衣及賛達磨像。忍詫光之慰寄、謾唱禅宗。已乏師承、亦無戒検、都下鄙之。迄西演心宗、縉紳士庶欲混忍而擯」とあるのは参考になろう。

すなわち、『元亨釈書』栄西伝によれば、淳熙十六年（一一八九）に、能忍は宋国で禅宗が盛んであることを聞いて、門弟を入宋させ、阿育王山の臨済宗大慧派の拙庵徳光（仏照禅師、一一二二～一二〇三）は法衣と賛文を記した達磨像を与えた。そして、能忍はこれを受けて謾りに「禅宗」を布教したが、「師承」と「戒検」がないことをそしられた。そして、栄西が心宗（禅宗）を弘めようとしたところ、能忍とともに栄西も擯斥しようとしたと記されている。ちなみに、能忍が徳光より得た法衣・達磨像のほか、仏舎利などが今に伝わっている。

『元亨釈書』栄西伝のうち、史料的な裏付けをとることが難しい「已乏師承、亦無戒検、都下鄙之」の記事であるが、能忍その人は拙庵徳光よりの嗣法を主張したとみられ、少なくとも能忍以下その後の達磨宗の門流たちは、拙庵徳光の法脈を相承したことを主張した。一方で、『百練抄』建久五年七月五日条にみられる一件は、臨済宗を伝えた栄西に多大な打撃を与え、同一視された能忍との差別化が、栄西にとって日本で禅を弘める上での重要な課題となった。そして、栄西は先行する能忍と思想的な決別を目指し著作『興禅護国論』（一一九八年）を編んでいる。

達磨宗とは、当時は禅宗の別称の一つであり、一つの特定の宗派名を指す言葉ではなかった。『百練抄』建久五年七月五日条の、「達磨宗」を「建立」との風聞も、能忍にとっては、「禅宗」の布教という意味合いであったかもしれない。『元亨釈書』を記した虎関師錬（一二七八～一三四六）の理解も、おおよそこのようであろう。

一方、栄西は『興禅護国論』の中で、「問曰、或人妄称禅宗名曰達磨宗。而自云、無行無修、本無煩悩、元是菩提。是故不用事戒、不用事行、但応用偃臥。何労修念仏供舎利長斎節食耶〈云云〉。是義如何」という質問に対して、「答曰、其人無悪不造之類也。如聖教中言空見者是也。不可与此人共語同座。応避百由旬矣」（大正蔵八〇・八a）と述べている。ここから、「達磨宗」と称した人がいたこと、その人と栄西は決別したことがわかるわけであり、それは能忍に他ならない。『百練抄』と『興禅護国論』からは、「達磨宗」の呼称が自称と他称の両方であった可能性が示されている。

また、能忍の門流である徹通義介（一二一九～一三〇九）の熊本県広福寺所蔵『嗣書之助証』には、「摂州三宝寺能忍」について「雖為八宗講者、進以為達磨正宗初祖、蒙宜下、自爾日本国裏初仰達磨宗」と記している。この記事は、門流において

もなおその名称が受け継がれたことを示していよう。以上のことから、鎌倉時代の史料からは、「達磨宗」が「禅宗」の一般的な別称でもあったことを踏まえつつも、能忍の系統は、鎌倉時代の史料にしたがって「達磨宗」と呼称することが妥当であると判断するものである。

能忍の後継者にして達磨宗の二祖たる仏地房覚晏は、京都東山、比叡山末の奈良多武峰で布教した。後にその門弟たちは、栄西のもとに学んで入宋し曹洞宗を伝えた道元のもとに参じ、その僧団の礎を築くことになる。このように、鎌倉時代に禅宗が伝来した当時、達磨宗は臨済宗と曹洞宗を日本に伝えた栄西・道元と直接関係し、多くの影響を与えた。

ところが達磨宗は早くに廃れたため、その祖である大日房能忍の著作は残っておらず、一派の実態も長らく不明であった。そのため、その思想と展開は、かねてより日本禅宗史における主要な研究テーマの一つとなっていた。そして、後継者たる仏地房覚晏の自著『心根決疑章』が発見されたことで、その思想を直接研究することが初めて可能となったのである。このように、伝来当初の禅宗の展開を知る上で、新出史料の『心根決疑章』、ならびにその著者覚晏の事績を分析することは、不可欠の作業と言えるのである。

達磨宗の研究において、これまで大きく研究動向を動かした重要なものが幾つか存在している。その最たるものが、高橋秀栄によって発見紹介された旧三宝寺所蔵史料「正法寺文書」である（高橋秀栄「三宝寺の達磨宗門徒と六祖普賢舎利」、『宗学研究』二六、一九八六年）。その後、この成果を用いた研究が積み重ねられていった。

次いで、石井修道によって金沢文庫所蔵の達磨宗関連史料『成等正覚論』が達磨宗典籍として紹介されたことも大きかった（石井修道「仏照徳光と日本達磨宗―金沢文庫保管「成等正覚論」をてがかりとして（上・下）」、『金沢文庫研究』二〇―一一、一九七四年）。

また、真福寺文庫より『禅家説』という典籍が発見され、そこに能忍の名が記されていたこともあり（末木文美士・和田有希子「『禅家説』解題」『中世禅籍叢刊』第三巻『達磨宗』、臨川書店、二〇一五年）、達磨宗に関する研究は再び盛んになってきている。

このような研究動向の中、達磨宗の新出史料である『心根決疑章』の鎌倉末期の写本が金沢文庫より発見された。本史料は承久元年（一二二一）に仏地房覚晏が撰述したものであり、覚晏は「扶桑第二相承沙門」と自述していた。日本の禅宗二祖を

自称していたのであり、禅僧として執筆した著述であることが確認されたのである。

これまで、達磨宗に関連する書物かと推定された著書は『成等正覚論』『禅家説』をはじめとしていくつか紹介されてきたが、達磨宗僧侶が著述したことが確定できる書籍の発見ははじめてのことである。

しかも、これまでは、日本における禅籍とすれば、栄西の『興禅護国論』（一一九八年）が最初であり、ついで道元の『普勧坐禅儀』（一二二七年）と考えられてきた。しかし、覚晏の『心根決疑章』（一二二一年）は栄西と道元の間に位置づけられるものであるから、『心根決疑章』は日本における二番目に古い禅籍ということになる。かかる文献が発見されたことの意義は大きい。

本史料の正確な読解により、栄西と対立し、後に曹洞宗に吸収されていった達磨宗がどのような思想であったのかを明らかにできるだろう。さらに、覚晏への参学後に道元に参じた孤雲懐奘（一一九八～一二八〇）が、後に道元の法を嗣いで永平寺の二世となるが、覚晏の思想を理解することで、覚晏と道元の思想的な相違についても明らかにすることができるだろう。このように、日本に禅宗が導入された頃、どのように禅が受容され、展開していったのかをも解明することができよう。

ただし同書は、『首楞厳経』『円覚経』などの経典、倶舎や唯識・天台などの教理、ならびに禅宗の一大哲学書たる『宗鏡録』百巻など、各種各様の文献・教理を引用しており、その内容は極めて難解である。そこで、各専門家の協力を仰ぎ会読することで、その思想の読解を目指した。

中国唯識説の専門家として吉村誠、日本唯識説の専門家として師茂樹、天台教学の専門家として山口弘江、『宗鏡録』ならびに中国禅思想の専門家として柳幹康、日本仏教思想ならびに達磨宗の専門家として高橋秀栄の協力を得た上で、日本禅思想を研究する筆者が中心となり読解を進めた。なお本研究は、JSPS科研費JP20K00060の助成を受け、筆者を研究代表者、吉村誠、師茂樹、山口弘江、柳幹康を共同研究者、高橋秀栄を研究協力者としている。本論はその成果の一部である。

## 凡例

■本訓註では称名寺所蔵（金沢文庫管理）『心根決疑章』（以下、金沢文庫本）を底本として用いる。その本文はすでに舘隆志「称名寺所蔵（金沢文庫管理）『心根決疑章』翻刻―達磨宗新出史料の紹介」（『東アジア仏教研究』一七、二〇一九年）が翻

刻しており、本訓註にもこの成果を用いている。

■異本として江戸時代に刊行された国文学研究資料館所蔵『心根決疑章』（以下、国文研本）があり、適宜取り上げる。なお、国文研本の翻刻と、金沢文庫本との対校は、別の機会に詳しく論じる予定である。

■文量を踏まえて全体を大まかに三分割して読解を進め、その成果を三年に分けて発表する予定であり、本論はその最初の成果にあたる。

■各段落ごとに①から数字を振っているが、これは大まかな文脈や、文量を踏まえた便宜上のものである。

■最初に原文を載せ、次に書き下し、次に語注、次に訳文、次に補注の順番で掲載した。また、金沢文庫本を原文として掲載するが、その際、金沢文庫本にある訓点、返り点は掲載しなかった。

■使用する漢字は常用漢字を基本とする。

■金沢文庫本における書写時の誤読・誤写と思われる漢字については、書き下しに際して改め、その当該漢字右下に「＊」を附し、注記にてその旨を記している。

■書き下しにあたり、金沢文庫本にある訓点や返り点は参考するに止めた。たとえば、金沢文庫本には「唯一遂二使一禅家解二経一」とあるが、この訓点通りに読んでも意味が理解できない。また、この他の訓点や返り点からも、金沢文庫本の訓点や返り点は著者自身が付けたものとは考えがたい。そのため、金沢文庫本の訓点や返り点と一致していない読みが少なくないことを予めお断りしておきたい。

■本論に関する以下の論文は略称を用いる。

高橋秀栄「鎌倉時代の僧侶と『首楞厳経』」『駒澤大学禅研究所年報』七、一九九六年、九五―一一八頁＝［高橋一九九六］。

西村玲「中世における法相・禅受容―貞慶から良遍へ、日本唯識の跳躍」『日本思想史研究』三一、一―一七、一九九九年＝［西村一九九九］。

横内裕人「大和多武峰と宋仏教―達磨宗の受容をめぐって」『アジア遊学』一四二、二〇一一年、五七―六一頁＝［横内二〇一一］。

末木文美士・和田有希子「『禅家説』解題」『中世禅籍叢刊』第三巻『達磨宗』、臨川書店、二〇一五年＝［末木・和田二〇一五］。
舘隆志「称名寺所蔵（金沢文庫管理）『心根決疑章』翻刻―達磨宗新出史料の紹介」（『東アジア仏教研究』一七、二〇一九年）＝［舘二〇一九］。
舘隆志「新出史料『心根決疑章』の発見とその意義―達磨宗二祖仏地房覚晏の著述をめぐって」（『印度学仏教学研究』六八―二、二〇二〇年）＝［舘二〇二〇A］。
舘隆志「達磨宗新出史料『心根決疑章』と仏地房覚晏」（『駒沢大学仏教学部論集』五一、二〇二〇年）＝［舘二〇二〇B］。

■本論における略称は以下の通り。大正新脩大蔵経＝大正蔵。卍続蔵経＝続蔵。大日本仏教全書（大日本仏教全書刊行会）＝大日仏。道元禅師全集（春秋社）＝道元全。

## 『心根決疑章』訓註

①［原文］心根決疑章　　扶桑第二相承沙門覚宴述

夫大小顕密之教、西竺東夏之説、判於識与根、廃立不一。唯遂使禅家解経、円楞二文倶失幽旨、濫於法相帯権之説。方今愍彼迷津、粗示方隅而已。

［書き下し］心根決疑章　　扶桑第二相承沙門の覚宴述す。

夫れ大小・顕密の教、西竺・東夏の説、識と根とを判ずること、廃立一ならず。唯だ遂に禅家をして経を解かしむるのみなれば、円・楞の二文倶に幽旨を失ない、法相帯権の説に濫ぜり。方に今、彼の迷津を愍れんで、粗ぼ方隅を示す而已。

○心根決疑章…承久三年（一二二一）に仏地房覚晏によって撰述された［補1］。○心根…六根中の意根のこと。○決疑…疑いを解決する。○章…文章。○扶桑第二相承沙門…日本禅宗第二祖のこと［補2］。○覚宴…宴は晏の誤写とみられる。臨済宗大慧派の仏地房覚晏（生没年不詳）のこと［補3］。○廃立…二つのもののうち一方を廃して他方を立てること。

○唯遂使禅家解経、円楞二文倶失幽旨、濫於法相帯権之説…［補4］。○禅家…禅宗、または禅僧のこと。鎌倉時代、諸宗の僧侶は禅宗や禅僧を「禅家」と表記することがあった［補5］。○円楞…『円覚経』と『首楞厳経』のこと［補6］。○円…『大方広円覚修多羅了義経』のことで、略して『円覚経』という。禅宗で広く読まれた経典の一つ［補7］。○楞…『大仏頂如来密印修証了義諸菩薩万行首楞厳経』のことで、略して『首楞厳経』『楞厳経』という。禅宗で広く読まれた経典の一つ［補8］。○幽旨…奥深い旨。幽玄至妙の旨趣。○法相…教えの特質。一切のものの真実の姿。一切諸法の本性。ここでは、宗派としての法相宗のことを指している。○帯権…人を教化するために仮に設けた手段を帯びていること。○迷津…人を惑わす誤った道。○方隅…一方の隅。四方の隅。

［訳］心根決疑章　　扶桑第二相承沙門の覚宴（晏）述す。

そもそも、大乗小乗・顕教密教や、西竺（インド）・東夏（中国）の教説は、識と根とを判じて、〔何を〕廃して〔何を〕立てるかについての〔解釈の〕仕方は一つだけではない。ただ、禅家に経を解かせただけでは、『円覚経』と『首楞厳経』という二つの〔経〕文は倶に奥深い意味がわからなくなってしまうし、法相〔宗〕の帯権（仮の手段）の教えと区別がつかなくなってしまう。そこで今、そのような誤った考え方を愍んでその一端を示すのである。

［補注］

1　心根決疑章…承久三年（一二二一）に仏地房覚晏によって撰述された。金沢文庫本『心根決疑章』には、表紙右下に湛睿と、左下に栄禅の名が記されている。本如房湛睿（一二七一～一三四六）は称名寺長老であるが、栄禅（生没年不詳）については、具体的には良く分からない。表題の「心根決疑章」と「栄禅」の筆蹟が一致し、かつ本文における「心根」の文字が一致することなどから、栄禅の手によって書写されたと判断される。書写に関する奥書などの書き入れは記されていないため、栄禅の書写本を湛睿が入手したという可能性も想定される。金沢文庫本『心根決疑章』について、詳しくは［舘二〇一九］を参照されたい。本書は、後述するように覚晏が多武峰に在山中に執筆したとみられる。比叡山末の多武峰は近隣の興福寺と競い争うことが多くあり、唯識説に多く触れる点や、法相宗僧侶との問答が収録されているのはこのためであろう。

2　扶桑第二相承沙門…日本禅宗第二祖のこと。鎌倉時代前期に中国禅僧の法脈を受け嗣ぎ初祖たり得るのは、叡山覚阿、大

日房能忍、明庵栄西の三師である。このうち、覚晏は能忍の法を嗣いだ。この「扶桑第二相承沙門」について、本論では執筆者の自称と考えるが、その理由は以下の通りである。すなわち、『心根決疑章』が撰述されたわずか七年後の安貞元年（一二二七）には道元が帰朝し、その後、仁治二年（一二四一）に円爾（一二〇二～一二八〇）が帰朝、渡来僧の蘭渓道隆（一二一三～一二七八）の来朝は寛元四年（一二四六）である。以後、多くの僧侶が入宋し、また中国僧も多く来日し、多くの僧侶がそれら入宋僧・渡来僧に参じて後にその法を嗣いだ。年月を経るにしたがって、「扶桑第二相承沙門」の価値が下がっている以上、この記述は、入宋僧が極めて少ない時期でなければならなず、後の時代の追記とは考えがたいためである［舘二〇二〇B］。この点、能忍の場合は「金剛阿闍梨能忍」という称を用いていたことが指摘されており［末木・和田二〇一五］、明確な相違が確認できることは注目されよう。この自称は、覚晏が本書を禅僧の立場から執筆したものであることを示していよう。

3　覚宴…宴は晏の誤写とみられる。臨済宗大慧派の仏地房覚晏（生没年不詳）のこと。もと比叡山の僧侶であったか。大日房能忍に参じ、その法を嗣ぎ、能忍から「臨済嗣書」「血脈」「六祖普賢舎利〈一粒〉」「能忍和尚信牒」「仏照禅師返牒」「練中・勝弁在唐記」などを相承している。能忍寂後も東山で活動し、その時の弟子として、覚禅懐鑑（生没年不詳）、大歇了心（？～一二五七）がいる。懐鑑は能忍の法を嗣ぎ、後に道元に参じた。了心は師を栄西に変え、後に栄西法嗣の退耕行勇（一一六三～一二四一）の法を嗣いだ。また、覚晏は東山時代に大麓（摂政）の請に赴くことがあった。その後、覚晏は多武峰に活動拠点を移し、ここでは孤雲懐奘（一一九八～一二八〇）が参じ、懐奘は覚晏の法を嗣ぎ、後に道元に参じてその法を嗣いでいる。この他、覚晏は『首楞厳経』に精通し、初めて訓点を付した僧侶としてその名が伝わる。承久三年に『心根決疑章』を撰述し、「扶桑第二相承沙門」と自称した。生没年は不詳であるが、寛元四年（一二四六年）に、道元が懐鑑に請われて「為先師覚晏道人請上堂」を永平寺で行なっている。詳しくは、［舘二〇二〇B］を参照されたい。

4　唯遂使禅家解経、円楞二文倶失幽旨、濫於法相帯権之説…禅家のみに「心根」を解釈させるのであれば、『円覚経』と『首楞厳経』の深い意味は失われてしまうし、法相〔宗〕の権教の教えと区別がつかなくなってしまう。この後、説一切有部、法相宗、『首楞厳経』をもって解釈していることからすれば、禅のみではなくさまざまな諸説を合わせてはじめて正しく理解できるという著者自身の理解が読み取れる。

5　禅家…このような文脈で用いられる「禅家」には、安易な印可を用いている禅者・禅宗に対する否定的な意味合いが含まれていることが多い。一方、現状ではこの時点の日本にほとんど禅が弘まっていないと想定されるため、当時の日本においてこのような理解が共有される状況であったのかは疑問である。あるいは、中国の禅籍などを通して、そのような禅がはびこっているという知識の上で、それを自身が正すという意味合いが含まれているとも考えられる。この点、平安末期の多武峰の経暹（一〇一三～一〇九三）は、「律宗・法相宗・三論宗・華厳宗・天台宗」の他に「達磨宗」（禅宗）も学んでおり（『談山略記』『多武峰略記』）、また、「多武峰が入宋僧園城寺成尋の系譜を受け継ぐ僧侶の所住するところであった」ことなども指摘されている［横内二〇一一］。この他、興福寺の貞慶（一一五五～一二一二）、良遍（一一九四～一二五二）の師弟の禅受用が指摘されており、あるいは、当時の南都で行なわれていた禅に対する批判という意味合いもあったのかもしれない。中世における法相宗の禅受容については［西村一九九九］を参照。

6　円楞…『大方広円覚修多羅了義経』（略して『円覚経』）と、『大仏頂如来密印修証了義諸菩薩万行首楞厳経』（略して『首楞厳経』『楞厳経』）のこと。ともに、宋代以降の禅宗で盛んに用いられた。『永平広録』巻五「永平寺語録」の上堂に、「所以勿見孔子・老子之言句、勿見楞厳・円覚之教典〈時人以楞厳・円覚教典多謂禅門所依。師常嫌之〉」（道元全三・二五四）とある。この割註における、「時人」は達磨宗門下をも含んでいよう。『永平広録』巻五は達磨宗の懐鑑門弟であった義演（？～一三一四）によって編されていることは注目すべきであり、達磨宗徒においては、「楞厳・円覚」が「多謂禅門所依」として理解されていたとみられよう［舘二〇二〇B］。

7　円…栄西は『興禅護国論』の中で『円覚経』を引用し、明恵（一一七三～一二三二）も『宗密疏』を通して『円覚経』を用いている。ただし、この時代の日本で、どの程度『円覚経』が用いられていたのかについては、良く解らない。『永平広録』巻五「永平寺語録」に記された「時人以楞厳・円覚教典多謂禅門所依」（道元全三・二五四）との割註は、当時の禅門における『円覚経』の受用状況を考える上で重要な示唆を与えよう。

8　楞…『心根決疑章』では『首楞厳経』を多く用いているが、『三大尊行状記』懐奘伝に、「参多武峰達磨宗覚晏上人。聞見性成仏之旨、至首棱厳之頻伽瓶喩。知無空之去来」（曹全一六・一四）とあるように、覚晏は多武峰では『首楞厳経』を用いた接化を行なっていたことが伝えられている。称名寺所蔵（金沢文庫管理）『法華文句第二雑見聞』の中に、「仏地坊、首楞

経、始テ点スト云々、本山僧」［高橋一九九六］とあり、『首楞厳経』に始めて訓点をつけた人として記録されている。また、良心（持阿、一二六二～一三二三）の『選択決疑抄見聞』に、「然仏地房、以義亘二十五人釈成之也」（浄全七・六四一ｂ～六四二ａ）とあり、覚晏は、『首楞厳経』を釈成した僧侶として記録されている。覚晏は『首楞厳経』に精通し、それを布教に用いていたことを、中世史料は伝えている［舘二〇二〇Ｂ］。鎌倉時代の僧侶における『首楞厳経』の受用については［高橋一九九六］を参照。

②［原文］大勘殊途、有三宗異。薩婆多宗説眼耳鼻舌身色形異者名為扶根、扶於清浄根四大故。清浄根者、義如珠宝光之明浄、一類清浄四大所成、非肉眼境、名清浄根〈清浄根義、諸教皆同〉。第六意根、非四大種、取六識之中前念六識随一、為後意識之根。如火前焔、引後焔。故凡六根者、増上出生於六識故、名之為根。

［書き下し］大むね殊途を勘ずるに、三宗の異なり有り。薩婆多宗、眼耳鼻舌身の色形の異なる者を説きて名づけて扶根と為す、清浄根の四大を扶くるが故なり。清浄根とは、義は珠宝の光の明浄なるが如くして、一類の清浄の四大の成す所にして、肉眼の境に非ざるを、清浄根と名づく〈清浄根の義、諸教皆な同じ〉。第六の意根は、四大種に非ず、六識の中に前念の六識の随一を取り、後の意識の根と為る。火の前の焔、後の焔を引くが如し。故に凡そ六根は、六識を増上出生するが故に、之を名づけて根と為す。

○殊途…殊塗。異なった道。○有三宗異…ここでいう三宗は、薩婆多宗（説一切有部）、唯識宗（法相宗）、『首楞厳経』の宗の三つを指している。○薩婆多宗説眼耳鼻舌身色形異…［補1］。○薩婆多宗…説一切有部のこと。南都では「さつばた」、北嶺では「さはた」と読んだ。覚晏は北嶺出身の僧侶なので、ここでは「さはた」と読んでおく。○扶根…扶塵根の略。扶塵根は眼球や耳孔などのように目に見える身体的な器官。○清浄根者～名清浄根…［補2］○清浄根…機能としての器官。勝義根とも。○四大…地水火風。○一類…あるもの。○肉眼…人間の肉身の眼。四大から作られている。○意根…六根の一。知覚の器官。○四大種…地水火風の四元素。○六識…眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識。○随一…どちらか一方。どちらか一つ。○故凡六根者、増上出生於六識故、名之為根…［補3］。○六根…眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根。○増上出生…増上は強める。出生は全くないものが新たに生み出される。○如火前焔、引後焔…［補4］。

〔訳〕〔心根についての教説を〕大まかに勘案してみると、三宗の異なりがある。〔第一の説〕薩婆多宗（説一切有部）では眼耳鼻舌身という〔それぞれ〕色形が異なる〔身体的な〕器官を「扶根」と名づける。清浄根の四大（地水火風）を扶けるからである。清浄根というのは、〔その語〕義は、珠宝の光が明るく浄らかなように、清浄な四大（地水火風）〔の元素〕がつくりだしたあるもので構成され、人間の肉身の眼で見える〔色〕境ではないので、「清浄根」と名づけるのである〈清浄根の義は、諸教が皆な同じである〉。第六の意根は四大種（地水火風）ではなく、六識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識）の中に前念の六識のどれか一つを取り、〔そのどれか一つが〕後の意識の根となるのである。火〔が燃えている時〕の、前の焔が後の焔を引くようものである。それゆえに、あらゆる六根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根）は六識を強めて新しく生み出すので、それゆえに「根」と名づけるのである。

〔補注〕

1　薩婆多宗説眼耳鼻舌身色形異…『薩婆多宗五事論』に「法有五種。一者色法、二者心法、三者心所有法、四者心不相応行法、五者無為法。何名色法。謂彼一切従四大種、四大所造所生諸色。何謂四大。地界水界火界風界。何名造色。謂眼根耳根鼻根舌根身根。諸色諸声諸香諸味、及触一分兼無表色」（大正蔵二八・九九五c）とある。

2　清浄根者～名清浄根…『七十五法名目』巻一に「問、於眼等五根、扶根・清浄根体性如何。答、扶根者、色香味触四境也。清浄根者、体清浄故、如珠宝光、其体極微。挍扶根不可見有対色也」（大正蔵七一・八九一c）とある。『七十五法名目』の成立については定かではないが、金沢文庫には建仁元年（一二〇一）の奥書を有する写本が所蔵されているので、少なくとも『心根決疑章』より前に成立している。

3　故凡六根者、増上出生於六識故、名之為根…基（六三二～六八二）『成唯識論述記』巻五「論、領順境相至、名不苦楽受。述曰、増上出生名根」（大正蔵四三・四二三a）、『宗鏡録』「問、根以何為義。答、根者即五根、有増上出生義故、名之為根」（大正蔵四八・七二五a）とある。

4　如火前焔引後焔…澄観（七三七～八三八）『大方広仏華厳経疏』巻一四「而大通衆経、第二依火焔起滅喩中、三義同前。初唯焔者、謂焔起滅、有其二義。一、前焔謝滅、引起後焔。後焔無体而、不能知前焔。前焔已滅、復無所知。是故各各、皆不相知。二、前焔若未滅、亦依前引無体、故無能知。後焔未生故無所知」（大正蔵三五・六〇三c）とある。ただし、「前焔

引後焔」とある表現からは、延寿（九〇四～九七五）『宗鏡録』巻七六「又如灯焔前焔引後焔。後焔続前焔、相続不断、似常似一、凡夫不達。或執生死為常、不知前焔無体、因後焔続起。後焔無体、仗前焔引生。焔焔皆虚、自性寂滅。此一念心、亦復如是。新新生滅、続続輪廻。乃至一念不住、猶如灯焔、不細観察、執此生滅、為一為常。又不了前焔纔滅、後焔続生、念念相続」（大正蔵四八・八三八ａ）からの引用ではないかと考えられる。

③［原文］又六識者、見聞色声属眼耳不名為識。経部破之、立為識見等。首楞厳経、阿難白言、見是其眼、心知非眼〈已上〉。是則、阿難述本小執也。如来斥之言、若眼見者、則諸已死、尚有眼存、応皆見物。若見物者、云何名死〈已上〉。

［書き下し］又た六識は、色声を見聞するをば眼耳に属して名づけて識と為さず。経部、之を破るに立てて識見等を為せり。『首楞厳経』に、「阿難白して言く、見は是れ其の眼なり、心の知は眼に非ず〈已上〉」と。是れ則ち、阿難の本の小執を述ぶるなり。如来、之を斥けて言わく、「若し眼の見れば、則ち諸もろの已に死せるもの、尚お眼の存する有りて、応に皆な物を見るべし。若し物を見れば、云何んが死と名づけん〈以上〉」と。

○識…認識作用。○経部、破之立為識見等…［補1］。○経部…経量部。説一切有部から分派した部派仏教の一派。○識見…見るという認識は、識が行なうのであって、感覚機官（根）が行なうのではないとの主張。○首楞厳経～云何名死…［補2］。○阿難…仏十大弟子の一人、阿難陀のこと。禅宗では西天第二祖とする［補3］。○小執…小乗の執着。小乗のもっている見解。○如来…タターガタ（梵：Tathāgata）のこと。真如から来た人。真理に到達した人。仏陀のこと。仏の十号の一。

［訳］また六識については、色を見て声を聞くことは眼や耳に属するものであり、「識」とは名づけないとしていた。〔しかし〕経量部はこれを破り、「識見」などと定めた。『首楞厳経』に、「阿難は申し上げた、見るというのは眼のはたらきであり、心で知るというのは眼のはたらきとはちがいます〈以上〉」と。これは、阿難が自身の小乗の執着を述べたものである。世尊は、これをしりぞけて仰った、「もし眼が見るというなら、死んだものでも眼がまだあるのだから、当然、物を見るはずである。〔しかし〕もし物を見るならば、それは死とは言えないだろう〈以上〉」と。

［補注］

1　経部破之立為識見等…『阿毘達磨倶舎論』巻二「分別界品第一」に「何故、世間正見、唯意識相応。以五識倶生慧、不能決度故、審慮為先決度名見。五識倶慧無如是能。以無分別。是故非見。准此、所余染無染慧及諸余法、非見応知。若爾、眼根不能決度。云何名見。以能明利観照諸色故亦名見。若眼見者、余識行時、亦応名見。非一切眼皆能現見。誰能現見。謂同分眼与識合位能見非余。若爾、則応彼能依識見色非眼。不爾、眼識定非能見。所以者何。伝説、不能観障色故」（大正蔵二九・一〇c）とあるを踏まえる。『倶舎論』における経部の説としては、「経部諸師有作是説。何共聚、揵掣虚空。眼色等縁、生於眼識。此等於見、孰為能所。唯法因果。実無作用。為順世情、仮興言説、眼名能見、識名能了」（大正蔵二九・一一b）とある。遠藤信一「『倶舎論』における眼見家と識見家の論争」（『東洋学研究』三二六、一九九九年、一九〇―一八〇頁）も参照。

2　首楞厳経～云何名死…『首楞厳経』巻一に「阿難、言見是其眼。心知非眼、為見非義。仏言、若眼能見、汝在室中門能見不。則諸已死、尚有眼存、応皆見物。若見物者、云何名死」（大正蔵一九・一〇八a）とある。

3　阿難…仏十大弟子の一人、多聞第一の阿難陀（梵：Ānanda）のこと。釈迦族の王族、斛飯王の子、提婆達多の兄弟とされる。釈尊が成道後、初めて迦毘羅衛城に帰ってきた際に出家し、爾来常に釈尊に随侍して法を聞き、第一結集にも参加したという。禅宗においては、釈尊の入滅後、摩訶迦葉から法を受け嗣ぎ、西天第二祖となったとされる。

④［原文］然小乗宗、見属於眼清浄四大照色之照能。既見色已、胸中謂言、是青是黄。爾時名為眼識了別。聞覚例知。小乗有部所立如斯。

［書き下し］然るに小乗宗、見は眼の清浄の四大の色を照らす照能に属す。既に色を見已わり、胸の中にて謂いて言わく、「是れ青なり、是れ黄なり」と。爾の時、名づけて「眼識の了別」となす。聞と覚とをも例知せよ。小乗有部の立つる所は斯の如し。

○小乗宗…部派仏教の諸宗のこと。ここでは、前段を受けているので、薩婆多宗のことを指しているとみられる。○眼清浄四大照色…［補1］。○照能…照らすというはたらき。○能…認識、または能動の主体。○既見色、已胸中謂言、是青是黄…［補2］。○爾時名為、眼識了別。聞覚例知…［補3］。○了別…分別。識別。○眼識…視覚の認識。見ることに

よって生ずる認識。○説一切有部…部派仏教時代の部派の一つ。

［訳］しかし、小乗宗（薩婆多宗）は、見るという行為が眼の清浄なる〔地水火風の〕四大の作り出した色を照らしている照能（照らすというはたらき）に属すると〔主張〕する。色を見たうえで、心中で「これは青色だ、これは黄色だ」と言う。そのときに「眼識の了別」と名づける。聞（耳識）と覚（鼻識・舌識・身識）とも〔眼識と〕同じようであると知りなさい。小乗の説一切有部の立場はこのようである。

［補注］

1　眼清浄四大照色…『大宝積経』巻六九「広果天授記品」「何者是眼。謂清浄四大所造色名為眼。何等是四大。謂清浄地界、水火風界」（大正蔵一一・三九〇ａ）とあることを踏まえるか。

2　既見色、已胸中謂言、是青是黄、爾時名為眼識…道倫（七～八世紀）『瑜伽論記』巻九「真実義品」に「従眼識後起意識始分別之、我眼見色説眼所見、是青黄等色」（大正蔵四二・五〇五ｂ）とある。

3　爾時名為、眼識了別。聞覚例知…『阿毘達磨識身足論』巻三「有六識身。謂眼識耳鼻舌身意識。問、眼識何所了別。答、眼識了別諸色。何所不了別。謂十一処。問、耳識何所了別。答、耳識了別諸声。何所不了別。謂十一処。問、鼻識何所了別。答、鼻識了別諸香。何所不了別。謂十一処。問、舌識何所了別。答、舌識了別諸味。何所不了別。謂十一処。問、身識何所了別。答、身識了別諸触。何所不了別。謂十一処。問、意識何所了別。答、意識了別、眼色及眼識、耳声及耳識、鼻香及鼻識、舌味及舌識、身触及身識、意法及意識」（大正蔵二六・五四六ｃ）とあるを踏まえる。

⑤［原文］二唯識宗説、前五根中扶根清浄色根二義全同有宗、第六意根、其義永殊。謂以第七現在末那、為其意識俱有根也。故瑜伽論、以前念意識、雖為其意識生因、不名為根。以此而言、小宗以生因為其根者、非尽理也。無有俱有依義故也。立根廃立、其理如斯。

［書き下し］二に唯識宗説くらく、前の五根の中の扶根と清浄との色根の二義は全く有宗に同じなるも、第六の意根は、其の義は永く殊なると。謂く、「第七の現在末那を以て、其の意識の俱有根と為す」と。故に『瑜伽論』に、「前念の意識を以て、其の意識の生因と為すと雖も、名づけて根と為さず」と。此を以て言えば、小宗の「生因を以て其の根と為す」とは、理を尽

すに非ず。俱有依（くうえ）の義有ること無きの故なり。根を立つる廃立、其の理（ことわりかく）斯の如し。

○唯識宗…法相宗。○扶根…扶塵根の略。扶塵根は眼球や耳孔などのように目に見える身体的な器官。○色根…眼根、耳根、鼻根、舌根、身根の五根。○有宗…有宗で俱舎宗を指すことがあるが、ここでは前段を受けて、薩婆多宗（説一切有部）のことを指している。○第六意根～為其意識俱有根…［補1］。○意根…六根の一。知覚の器官。○末那…唯識説における第七識。あらゆる自我の観念・煩悩の根拠とされる。○俱有根…心・心所のはたらきと同時にあって、その所依となる眼・耳等の六根をいう。○瑜伽論～不名為根…出典未詳。○瑜伽論…『瑜伽師地論』の略。○小宗…小乗の宗派の意。中世の日本で用いられた。○以生因為其根…［補2］。○生因…結果を生ぜしめる原因。○俱有依…心・心所法の所依三種の一つ。能依（よるもの）の心・心所法と同時にあって、その所依（よられるもの）となる法。『俱舎論』では五根、唯識説では五根と六七八識がこれに当たる。

［訳］第二〔の説〕は唯識宗（法相宗）に説かれているもので、前の五根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根）の中の扶根（身体的な器官）と清浄〔根〕における色根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根）の二〔つの言葉の意〕義については有宗（薩婆多宗）と全く同じであるが、第六の意根（知覚の器官）については、その意義は〔薩婆多宗とは〕全く異なっていて、「第七の現在末那識をもって、その意識の俱有根（心・心所のはたらきと同時に存在し、その所依となる六根）である」と言っている。それ故に、『瑜伽論』に「前念の意識が、その意識の原因となっても、根と名付けない」と言われる。このことを小宗（小乗宗）が「原因をもってその根としている」のだと言う者は、道理を充分に理解していないのだ。俱有依（心・心所法と同時に存在し、その所依となる法）の実体など無いためである。根を立てる際に何を立て何を廃するか、その道理はこの通りである。

［補注］

1　第六意根～為其意識俱有根…『成唯識論』巻三に「又与末那為依止故、第六意識依之而転。末那意識転識摂故、如眼等識依俱有根」（大正蔵三一・一四a）とあるを踏まえる。

2　以生因為其根…真諦（四九九～五六九）訳『阿毘達磨倶舎釈論』「眼等識不爾、依眼等根生、諸根一向唯為眼等識作生因」（大正蔵二九・一六四a）とある。

⑥［原文］又六識者、見為眼識、聞為耳識、嗅為鼻識、嘗為舌識、覚触為身識、於意識中与前五識同一刹那。同時意中取現量境、不帯名言、名為五倶意識、亦名明了意識也。

［書き下し］又た六識は、見を眼識と為し、聞を耳識と為し、嗅を鼻識と為し、嘗を舌識と為し、覚触を身識と為し、意識中に於いて前の五識と同一刹那なり。同時の意の中に現量の境を取りて、名言を帯びざるを、名づけて五倶の意識と為し、亦た明了意識と名づく。

○同時意～不帯名言…［補1］。○現量…直接知を得る過程と、ならびにその結果として得られる智。感覚器官と外界の事物の接触から生ずると考えられている。○名言…概念を言い表す名称。○五倶意識…五識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識）のいずれかとともに起こる識、すなわち意識（第六識）。○明了意識…四種意識の一つ。相応意識とも。前五識を伴ってはたらき、明らかに対象物を判断させる意識をいう。

［訳］また六識は、見ることを眼識とし、聞くことを耳識とし、嗅ぐことを鼻識とし、味わうことを舌識とし、触れること〔や体内感覚すべて〕を身識として、意識と前五識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識）とが同一の刹那にはたらいている。〔五識が〕同時に存在する意〔識〕の中に前五識の直接知覚の対象を認識するという状況があり、現量には分別がはたらかないことから、「五倶の意識」と名づけられ、また「明了意識」と名づけられた。

［補注］

1　同時意～不帯名言…現量には分別がはたらかないこと。『因明正理門論』に「此中現量除分別者、謂若有智於色等境、遠離一切種類名言」（大正蔵三二・八c）とある。

⑦［原文］第二刹那、随於比量、謂言此青此黄等時、猶為明了意識境名似帯質也。又以不帯本質過未等境為独影境、以能縁識名独頭意識也。亦名暗意識也。此教深探立第八識、以為本識、七六已還名為転識。然七八二識、互為其根〈云々〉。

［書き下し］第二刹那に、比量するに随い、「此れ青なり、此れ黄なり」等と謂いて言う時をば、猶お明了意識と為す境を似帯質と名づく。又た本質を帯びざる過未等の境を以て、独影境と為し、能縁の識を以て、独頭の意識と名づく。亦た暗意識とも名づく。此の教え深く第八識を探立し、以て本識と為し、七六已還を名づけて転識と為す。然るに七八の二識は、互いに其

の根と為る〈云々〉。

○刹那随於比量～名似帯質也…［補1］。○比量…推論。○帯質境・独影境…三類境。唯識説における認識の対象をその性質によって性境・帯質境・独影境の三種に分けたもの。性境は種子から実際に現れたもの。独影境は見分から仮に現れたもの。帯質境は以上両者の中間にあるもの。○帯質境…本質を有しているが、本質そのままの相を写していない対象のことで、心と対象の二者の力によって成立しているもの。○過未…過去未来。○能縁…客観を認識する主観をいう。○独頭意識…法相宗で意識を四種に分けるうち、前五識を伴わず単独にはたらく定中・独散・夢中の各意識をいう。○本識…根本的な識。阿頼耶識に同じ。真諦の訳語。○已還…以前。○転識…現にはたらいている識。阿頼耶識を除いた他の七つの識。

［訳］［最初の刹那の］次の刹那に、推論にしたがい、「青だ、黄色だ」などと言う時を、「明了意識（対象を判断する意識）」と言い、その境を「似帯質」と名づける。また本質を帯びていない過去未来などの境は「独影境」といい、能縁（認識する主観）の識は「独頭の意識」と名づけ、また「暗意識」ともいう。この教えは深く第八識を探り立てて「本識」とするもので、七六以前を「転識」とする。ただし、七八の二識は、互いにその根となる云々。

［補注］

1　刹那随於比量～名似帯質也…『宗鏡録』巻五十四「或於五塵上起執時、便是非量、即明了意識。前後許通三量。三境中、若縁五塵実法時、是性境。若後念行解心縁長等仮色時、即真独影、似帯質」（大正蔵四八・七三三a）とある。

⑧［原文］又意識所縁有二種法。一者通法。謂前五俱意識所縁前五境也。二者別法。謂雖五識但*自分別善悪無記之法塵也。法相所立、略知如斯。

［書き下し］又た意識の所縁に二種の法有り。一は通法なり。謂く、前の五の意識と俱に所縁の前の五境なり。二は別法なり。謂く、五識と俱*なりと雖も、自ら善悪無記を分別するの法塵なり。法相の立つる所、略ぼ知ること斯の如し。

○意識…識知する心。○所縁…認識する対象。○通法…〔前五識と意識との〕共通の認識対象。○五境…五つの感覚器官の対象。色・声・香・味・所触。○雖五識～法塵也…［補1］。○但…金沢文庫本、国文研本、ともに「但」とあるが、

内容からは「倶」の誤写かと考えられる。○無記…善でも不善（悪）でもないもの。○法塵…六塵の一つ。意根の対象であるもろもろの法をさす。○法相…教えの特質。一切のものの真実の姿。一切諸法の本性。ここでは、唯識宗である法相宗のことを指す。

［訳］また意識（識知する心）の所縁（認識する対象）には二種の法がある。一つ目は〔前五識と〕共通する法である。これは、前の五識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識）の意識（識知する心）とともに所縁（認識する対象）となる前の五境（色・声・香・味・所触）である。二つ目は〔前五識と〕別の法である。これは、五識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識）と同時に生起するが、〔五識の対象となる法とは別に、意識が〕独自に善悪無記を分別する対境である。法相宗の諸説は略ぼこのような内容である。

［補注］

1　雖五識～法塵也…意識には五倶意識（五識と同時に生起する意識）と不倶意識（五識と同時に生起しない意識）があり、前者には五同縁意識（五識と同じ対象を認識する意識）と不同縁意識があることを踏まえている。

⑨［原文］三楞厳会上顕於真実法相法性、永異前二。夫一切諸宗所立法相、未顕著故。筌第有帯*、魚兔難得。殊不能知、窮立法相即是法性真心之体、遂令法相之外更覓於法性。痛哉、々々。応知、楞厳根有二種、一者色根、二者心根。於色根中前五全同倶舎唯識。

［書き下し］三に、楞厳会上に、真実の法相・法性を顕わすこと、永く前の二に異なる。夫れ一切諸宗の立つる所の法相、未だ顕著ならざるが故に。筌第に滞*り有れば、魚兔得難し。殊に知ること能わず、窮めて法相を立てて即ち是れ法性真心の体なりといえば、遂に法相の外に更に法性を覓めしむるを。痛しき哉、痛しき哉。応に知るべし、楞厳の根に二種有り、一は色根、二は心根。色根中に於いて前の五は全く倶舎・唯識に同じ。

○楞厳会上…『首楞厳経』が説かれた場。楞厳は首楞厳、一切事究竟堅固の意。すべての物事にたいし、その奥源を極め、破滅することがないこと。○法性…諸法の真実なる本性。○顕著…はっきり現れる。○筌第有帯、魚兔難得…筌第有滞、魚兔難得。「得魚忘筌」「得兎忘蹄」の故事を踏まえる［補1］。○筌第…筌蹄。「荃」は魚を、「蹄」は兎を捕える罠。経

典の語句を「魚兎」をとらえる筌蹄にたとえている。○帯…国文研本は「滞」。書き下し文で「滞」に改める。○魚毟…魚兎。魚とうさぎ。○毟…毟は黷の略字。うさぎの子。○法相…教えの特質。一切のものの真実の姿。一切諸法の本性。○真心之体…［補2］。○真心…対立を超えた真の心。○色根…眼根、耳根、鼻根、舌根、身根の五根。○心根…根本の心。心のこと。○倶舎…倶舎宗。○唯識…唯識宗。法相宗。

［訳］第三〔の説〕に、楞厳会上では、真の法のありさま・本性を明らかにする仕方は、先の〔薩婆多宗と唯識宗の〕二つの立場とは全く異なっている。そもそも一切諸宗が立てる法相は、いまだ明らかになっていないからである。罠に気を取られれば、言〔葉（罠）を忘れて〕意（魚）を得ることは難しい。全く分かっていないのだ、突き詰めて「法相」を立て、それこそが法性真心の体であると言うのであれば、その結果〔人々は〕「法相」の外に更に「法性」なるものを探しもとめることになってしまうことを。なんとも痛ましいことではないか。以下のように理解すべきである。『首楞厳経』に説く根には二種ある。第一が色根（前五根の眼根、耳根、鼻根、舌根、身根）であり、第二は心根（第六意根）である。色根中の前五〔根〕は倶舎・唯識と全く同じである。

［補注］

1　筌第有帯、魚毟難得…筌第有滞、魚毟難得。『荘子』「外物」に「筌者所以在魚、得魚而忘筌。蹄者所以在兎、得兎而忘蹄」とある故事を踏まえる。圭峰宗密（七八〇～八四一）『円覚経大疏釈義鈔』巻一に「不滞筌蹄、忘詮得意」（続蔵一四・二二九d）とあるのが参考になる。

2　真心之体…子璿（九六五～一〇三八）『首楞厳義疏注経』「一迷為心。決定惑為色身之内。不知色身外洎山河虚空大地、咸是妙明真心中物棄之大海。唯認浮漚。迷中倍人、真可怜愍。二顕示真心者、真心之体本周法界。非妄非真、絶言離相、能摂一切世間出世間法」（大正蔵三九・八三八b）とあり、『宗鏡録』「楞伽経云、寂滅者名為一心。一心者、名如来蔵。能遍興造一切趣生。造善造悪、受苦受楽、果与因俱。故知一切無非心也。全揀門摂前第二破相教。全収門摂前第一説相教。将前望此、此則迴異於前。将此望前、前則全同於此。深必該浅、浅不至深。深者直顕出真心之体」（大正蔵四八・六一五c～六一六a）とあるのが参考になるか。

⑩［原文］首経四云、知精映法、攬法成根。根元目為清浄四大。名為意思、如幽室見。浮根〈浮根者扶根也〉四塵、流逸奔法〈已上〉。

［書き下し］『首経』四に云く、「知の精、法を映じ、法を攬りて根と成す。根の元を目けて清浄の四大と為す。名けて意思と為し、幽室より見るが如し。浮根〈浮根は扶根なり〉の四塵、流逸して法に奔る〈已上〉」と。

○首経四云～仮成此身已上…［補1］。○首経四云～四塵流逸奔法…［補2］。○四大…地水火風。○意思…こころの思い。○浮根…扶根。扶塵根のこと。眼球・耳孔などのように目に見える身体的な器官。勝義根（肉体内部の対象をとらえるはたらきをするもの）の対。○四塵…色・香・味・触の四つの対象。○流逸…流散。流れちる。

［訳］『首楞厳経』四巻にいう、「知るというはたらきの本性が法を映しだし、その法〔という体境〕を構成して〔意〕根（知覚の器官）とする。〔意〕根の根源が、「清浄の四大」（勝義根）である。それを意思と名づけ、あたかも奥の静まった部屋〔の中から外をのぞき〕見るようなものである。〔物質的な根である〕浮根〈浮根は扶根である〉の四大が流れ出して法へと突っ走るのである〈已上〉」と。

［補注］

1　首経四云～仮成此身已上…浄土宗の良忠（然阿、記主禅師、一一九九～一二八七）『観念法門私記』に、「直入心王等者、問、今言心王者、色心中何耶。答、是色根而非意識。以下文云如紅蓮花故。心根決疑章云、首楞厳経四云、知精映法、攬法成根。根元目為清浄四大。因名意思、如幽室見。浮根〈浮根者扶根也〉四塵、流逸奔法已上。資中云、前五根種、妄覚為性、意根同此四大何妨。若不許色為意根者、何乃畏労心破、将薬補養還得増強故。所依根、定兼其色相、如蓮華。現量所得、如世養虫、食人心肝。豈無形質〈云云〉。不遇此典、誰識因由。諸経不言、非無此意。相承学者、闕此不知。又孤山云、此取肉団心根、為慮知之所託也。正法念経云、如蓮華開合。円覚経云、六根四大中外合成。宗密疏云、四大為中、六根為外、内外和合、仮成此身〈已上〉」（浄全四・二四四b）とあり、『心根決疑章』の一文が引用されている。

2　首経四云～四塵流逸奔法…『首楞厳経』巻四「知精映法、覧法成根。根元目為清浄四大。因名意思、如幽室見。浮根四塵、流逸奔法」（大正蔵一九・一二三b）とある。

⑪［原文］資中云、前五種根、妄覚為性、意根同此四大何妨。若不許色為意根者、何乃畏労心破、将薬補養。還得増強故。所依根、定兼其色相、如是蓮花、現量所得。如世養*虱食人心肝。豈無形質。不逢此典、誰識因由。諸経不言、非無此意。相承学者、闕此不知。又孤山云、此取肉団心根、為慮知之所託也。正法念経云、如蓮花開合者是也。今便引処々之文、弥顕釈成。

［書き下し］資中に云く、「前の五種根、妄覚を性と為す、意根此の四大と同じく、何をか妨げん。若し色を意根と為すを許されざれば、何ぞ乃ち畏れ労して心破するに、薬を将って補い養わん。還って増強なること得るが故なり。所依の根、定めて其の色相を兼ね、是の蓮花の如きこと、現量の所得なり。世の*恙の虱の、人の心肝を食らうが如し。豈に形質無からんや」と。此の典に逢ざれば、誰か因由を識らん。諸経言わざるも、此の意、無きに非ず。相承の学者、此を闕き知らず。又た孤山云く、「此に肉団の心根を取りて、慮知の所託と為す。『正法念経』に「蓮花の開合の如し」と云うは是れなり」と。今ま便ち処々の文を引き、弥いよ顕らめ釈成せん。

○資中云、前五種根～豈無形質…［補1］。○資中…唐代の資中弘沇（生没年不詳）のこと［補2］。○五種根…眼根、耳根、鼻根、舌根、身根の五根。○妄覚…妄想覚観の略。相対的な立場にもとづくまちがった見方。○性…本質。○意根…六根の一。知覚の器官。○何乃…何故。○増強…ますます強くする。○所依…よりどころ。○現量…直接知を得る過程と、ならびにその結果として得られる智。感覚器官と外界の事物の接触から生ずると考えられている。○養虱食人心肝…養恙食人心肝［補3］。○養…恐らくは恙の誤写。書き下しでは「恙」に改める［補4］。○形質…からだ。○因由…原因。由来。○相承…受け嗣ぐこと。○孤山云、此取肉団～知之所託也…［補5］。○孤山…天台宗山外派の孤山智円（九七六～一〇二二）のこと［補6］。○肉団…肉団心。心臓のこと。○心根…根本の心。心のこと。○慮知…思慮分別。○正法念経云、如蓮花開合…［補7］。○正法念経…元魏・般若流支訳『正法念処経』のこと。○釈成…解説。

［訳］『楞厳経』疏』（資中疏）に言う、「前の五種根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根）は妄覚を本性とする、意根（知覚の器官）もこの四大同様、何の問題があろうか。もし色が意根（知覚の器官）ではないというなら、どうして恐れたり気をもんだりして心が破れた際に、〔色からなる〕薬で養生するのであろうか。〔実際にはその効により、〕体力を高めることができる。拠りどころとなる〔意〕根が必ずその色相を具えており、それが蓮花のようであることは、直接知覚によって知られる通りである。また、世に「恙という虫が人の心肝を食べる」と言われるようなものである。どうして、〔意根に〕形がないなどとい

えようか〔色からなる虫が食べるのだから、意根も当然色からなる〕」と。この経典に出会うことがなければ、かかる理由を誰が知ることができようか。〔余他の〕諸経にこのことが書かれていなくても、この意味がないからなのではない。それを受け継いだ学者が、このことを失い知らないのだ。また孤山智円が〔『請観音経疏闡義鈔』で〕言っている、「ここに肉団心（心臓）という心根があり、慮知（思慮分別）の拠り所である。『正法念処経』に、「〔心は〕蓮花が開いたり閉じたりするように〔朝には開き夜には閉じる〕」と言うのは、このことなのだ」と。ここで様々な文を引用して、徐々に明かし解説していこう。

［補注］

1　資中云、前五種根～還得増強……唐代、資中弘沇撰述の『〔楞厳経〕疏』（資中疏）からの引用。ただし、『〔楞厳経〕疏』（資中疏）は現存しない。

2　資中…唐代の資中弘沇（生没年不詳）のこと。『宋高僧伝』巻六「義解篇第二之三」「唐京師崇福寺惟慤伝」に「一説楞厳経、初是荊州度門寺神秀禅師、在内時得本。後因館陶沙門慧震、於度門寺伝出、慤遇之著疏解之。後有弘沇法師者。蜀人也。作義章、開釈此経、号資中疏。其中亦引震法師義例、似有今古之説」（大正蔵五〇・七三八ｃ）とある。

3　養虫食人心肝…養は恙の誤字。恙は人の心を食う害虫。『芸文類聚』巻七十五（六二四年）疾の章に、「風俗通曰、無恙、俗説疾也。凡人相見及書問者曰、無疾耶。按上古之時、草居路宿、恙噬虫也。食人心。凡相労問者曰、無恙乎。非為疾也」とあり、慧琳（七三七～八二〇）『一切経音義』巻三十二に玄応の音義を引用し「無恙〈以尚反。爾雅云、恙憂也。孫炎曰、恙病之憂也。案易伝云、上古草居露宿、恙噬虫也。善食人心、凡相労問、無恙乎。復因以為病也〉。」（大正蔵五四・五二三ａ）とある。『心根決疑章』を引用した良忠『観念法門私記』の注釈書である聖聰（一三六六～一四四〇）『観念法門私記見聞』には「如世養虫者、不知。若可尋医道也」（浄全四・二八四ｂ）とあり、「養虫」ついては解らなかったようである。浄土宗典籍における『心根決疑章』の引用とその後の受用については、別の機会を設けたい。

4　養…『肇論疏』巻中に引かれる『易伝』には「上古患恙虫食其心」（大正蔵四五・一八四ｃ）とあり、「養虫食人心肝」と殆ど同じように引用していることから、書き下し文では「養虫」を「恙虫」と改めて表記した。

5　孤山云、此取肉団～知之所託也…孤山智円『請観音経疏闡義鈔』「赤肉心即肉団心。正法念経中、如蓮華昼開夜合。即此心蔵也。俗書謂之方寸。以此心蔵唯方一寸故。然為慮知之所託附故」（大正蔵三九・九九八ｃ）。

6　孤山…天台宗山外派の孤山智円（九七六～一〇二二）のこと。杭州銭塘県の徐氏。天台教学を修し、山家派の四明知礼（九六〇～一〇二八）らと論争を繰り広げた。一方、儒・仏・道三教の融和統合を説く「三教合一論」を展開した。晩年、西湖の孤山（杭州市西方）に住した。著述は二十部余、百二十巻余りに及ぶ。

7　正法念経云、如蓮花開合…『正法念処経』巻六四「身念処品七」に、「心如蓮花、昼則開張、無日光故、夜則還合、心亦如是」（大正蔵一七・三八三ａ）とある。ただし、『心根決疑章』では、孤山智円『請観音経疏闡義鈔』そのままの引用ではなく、「正法念経云、如蓮華開合者是也」と略しているが、宋代・思坦『楞厳経集註』巻四「正法念経云、如蓮華開合者是也」（続蔵三九八・一一〇ａ）なども参照したと考えられる。

⑫［原文］円覚経云、六根四大、中外合成。宗密疏云、四大為中、六根為外、内外和合、仮成此身〈已上〉。依此経文、非云六根俱是四大耶。但宗密所釈、雖似順経、見於後文所釈之意、於此文謂言惣意別歟。故下疏云、然八識中不言第七者、義当見聞等塵根也。

［書き下し］『円覚経』に云く、「六根と四大と、中外合成せり」と。宗密『疏』に云く、「四大を中と為し、六根を外と為し、内外和合して、仮に此の身を成せり〈已上〉」と。此の経文に依れば、六根俱に是れ四大なりと云うに非ずや。但だ宗密の釈する所、経に順じて似ると雖も、後文の釈する所の意を見るに、此の文に於いて言惣意別と謂うか。故に下疏に云く、「然るに八識中に第七を言はざること、義は見聞等の塵根に当たれり」と。

○円覚経云、六根四大、中外合成…［補1］。○宗密疏云～仮成此身〈已上〉…［補2］。○宗密疏…『大方廣圓覺修多羅了義經略疏』のこと。○宗密…圭峰宗密（七八〇～八四一）のこと［補3］。○和合…調和。○六根俱是四大…［補4］。○疏云然八識中～塵根也…［補5］。○言惣意別…言総意別に同じ。言葉は一緒にみえるけれども、その内容は別になっている。○疏…経典に注釈する。○八識…第八の阿頼耶識。○第七…第七の末那識。○見聞…見聞覚知。見ること、聞くこと、知覚すること、識知することの併称。六識のうち、眼識は見、耳識は聞、鼻識・舌識・身識は覚、意識は知に相当。○塵根…根塵。目・耳・鼻・舌・身・意の六根と、色・声・香・味・触・法の六塵。

［訳］『円覚経』に言う、「六根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根）と四大（地水火風）と、中と外とが合わさり成立する」

と。『大方広円覚修多羅了義経略疏』（宗密疏）に言う、「四大（地水火風）を中とし、六根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根）を外とし、内と外とが合わさり、仮にこの身が成り立っている〈已上〉」と。この経文に依れば、六根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根）はすべて四大（地水火風）ということではないか。ただ宗密の解釈は経に準じているように見えるが、後文の解釈を見てみると、表現は同様でも意味は別である。それゆえに、下疏で言う、「しかるに、八識中に第七〔末那〕識を言わないのは、〔その〕意味は見聞〔覚知〕の六塵と六根に〔末那識が〕相当するためである」と。

［補注］

1　円覚経云、六根四大、中外合成…『円覚経』「六根四大、中外合成」（大正蔵一七・九一四ｂ）とあり、『宗鏡録』巻六十六「六根四大、中外合成」（大正蔵四八・七九〇ｃ）とある。

2　宗密疏云～仮成此身〈已上〉…『大方広円覚修多羅了義経略疏』（宗密疏）巻一「六根四大、中外合成、四大為中、六根為外、内外和合、仮成此身」（大正蔵三九・五四一ａ）とある。

3　宗密…荷沢宗の圭峰宗密（七八〇～八四一）のこと。果州（四川省）西充の人。儒仏道の三教に通じ『原人論』を著したほか、自身の帰趨を見出した『円覚経』に対し諸注釈書を著した。華厳宗第四祖の澄観に華厳教学を受け、華厳宗五祖とも される。宗密自身は「荷沢宗」を自称したが、実際には荷沢神会の系譜ではなく浄衆寺神会の系譜に属す。著書に『禅源諸詮集都序』『裴休拾遺問』がある。

4　六根俱是四大…四明知礼（九六〇～一〇二八）『金光明経文句記』巻四「以其六根俱是四大造色故也」（大正蔵三九・一三〇ｃ）とある。

5　疏云然八識中～塵根也…『大方広円覚修多羅了義経略疏』（宗密疏）巻一「然八識中不言第七者、義当見聞等塵也」（大正蔵三九・五四三ａ）とある。

⑬［原文］又云、前五各自種生自現行。四大所造浄色為体。意根即第七識。由此攀外起意識故〈已上〉。私云、悲哉。宗密、迷於円覚首楞両経廃立六根之相、拠於唯識以第七識為意根焉。円覚又*云、心清浄故、見塵清浄〈已上〉。是心根也。聞等亦爾。全同楞厳見根聞根。何以末那為見聞等。又次文云、見清浄故、眼根清浄〈已上〉。是色根也。耳乃至意、皆是色根。亦同首楞

所説色根。

［書き下し］又た云く、「前の五は各おの自種より自らの現行を生ぜるなり。四大の造る所の浄色を体と為す。意根は即ち第七識なり。此に由りて外に攀じて意識を起こすが故なり〈已上〉」と。私に云く、悲しき哉。宗密、円覚・首楞の両経の六根を廃立せるの相に迷いて、唯識に拠りて第七識を以て意根と為す。『円覚』の文*に云く、「心清浄なるが故に、見塵も清浄なり〈已上〉」と。是れ心根なり。聞等も亦た爾り。全く楞厳の見根聞根に同じ。何ぞ末那を以て見聞等と為すや。又た次の文に云く、「見清浄なるが故に、眼根清浄なり〈已上〉」と。是れ色根なり。耳乃至意も、皆な是れ色根なり。亦た首楞の所説の色根に同じ。

○前五各自種生～起意識故…［補1］。○前五…眼識、耳識、鼻識、舌識、身識の五識。○現行…現にはたらいているもの。唯識説において、阿頼耶識の中の種子から現象世界の事物が現れ出ること。○四大…地水火風。○浄色…清らかな物質的存在。五根をいう。○体…本体。根本のもの。○意根…六根の一。知覚の器官。○第七識…唯識では末那識を立てる。○意識…識知する心。○廃立…二つのもののうち一方を廃して他方を立てること。○唯識…唯識説。○円覚又云、心清浄故見塵清浄…「又」は「文」の誤字［補2］。○見塵…眼根の認識対象のこと。覚晏は、外塵を見るの意ではなく見塵として解釈。○心根…根本の心。心のこと。ただし、覚晏は心の根と書く心根を、四大で構成された物質であることを本書で主張する。○末那…唯識説における第七識。あらゆる自我の観念・煩悩の根拠とされる。○見聞…見聞覚知。見ること、聞くこと、知覚すること、識知することの併称。六識のうち、眼識は見、耳識は聞、鼻識・舌識・身識は覚、意識は知に相当。ここでは、見根・聞根の略。○又次文云、見清浄故、眼根清浄…［補3］。○見清浄故、眼根清浄…ここでの「見」は、『円覚経』を引用しているが、四字句にするために、見塵を「見」の一字に省略したもの。○色根…眼根、耳根、鼻根、舌根、身根の五根。○乃至…または。

［訳］また〔宗密の『大方広円覚修多羅了義経略疏』に〕言う、「前五根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根）は、それぞれ自〔分自身のそれに対応する〕種より自分自身の現行を生ぜしめるものである。四大（地水火風）が造りだした浄色（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根）を〔本〕体としている。意根は即ち第七識である。こういう理由で外に対象をとり意識を起こすのである〈已上〉」と。私の考えであるが、悲しいことである。宗密は、『円覚経』・『首楞厳経』両経の六根に関する議論を見失い、唯

識説に基づき第七識を意根としたのである。『円覚経』に言う、「心が清浄であるがゆえに、見の対境も清浄である〈已上〉」と。これこそ心根である。聞〔の対境〕等もまたこのようである。『首楞厳経』の見根・聞根と全く同じである。どうして末那識をもって見〔根〕聞〔根〕となすのか。また、〔『円覚経』の〕次の文に言う、「見〔の対境〕が清浄であるがゆえに、眼根も清浄である〈已上〉」と。これは色根である。耳根から意根までみな色根である。また『首楞厳経』の説くところの色根と同じである。

［補注］

1　前五各自種生～起意識故…『大方広円覚修多羅了義経略疏』（宗密）「前五各従自種生自現行。四大所造浄色為体。意根即第七識。由此攀外起意識故」（大正蔵三九・五四二ｃ）とある。

2　円覚又云、心清浄故見塵清浄…『円覚経』「心清浄故、見塵清浄。見清浄故、眼根清浄。根清浄故、眼識清浄。識清浄故、聞塵清浄」（大正蔵一七・九一四ｃ）とあり、『宗鏡録』巻六十六「心清浄故、見塵清浄。見清浄故、眼根清浄。根清浄故、眼識清浄。識清浄故、聞塵清浄」（大正蔵四八・七九〇ｃ）とある。

3　又次文云、見清浄故、眼根清浄…『円覚経』「見清浄故、眼根清浄」（大正蔵一七・九一四ｃ）とある。

⑭［原文］次文云、根清浄故、眼識清浄。〈乃至〉意識清浄〈已上〉。全同首楞識動了別。嗚呼悲哉。宗密未知心体見聞覚知立為根義。又慈恩唯識疏中、正法念経所説肉心為根之文、違於自宗末那為根之義。故自云、正法念経違此、応会〈云云〉。私云、基師於経欲設何会。又私云資中、以相如蓮花、虵食人心、為現量得。

［書き下し］次の文に云く、「根清浄なるが故に、眼識も清浄なり。〈乃至〉意識も清浄なり〈已上〉」と。全く『首楞』の「識、動じて了別す」に同じ。嗚呼、悲しき哉。宗密、未だ知らず、心体の見聞覚知の立てて根の義と為すを。又た慈恩の『唯識疏』の中に、「『正法念経』の説く所の肉心を根と為す」の文、自宗の末那を根と為すの義に違すを。故に自ずから云く、「『正法念経』は此に違す、応に会すべし〈云云〉」と。私に云く、基師は、経に於いて、何の会をか設けんと欲する。又た私に云く、資中、相の蓮花の如く、虵の人の心を食うを以て、現量の得と為す。

○次文云根清浄～意識清浄〈已上〉…［補1］。○眼識…視覚の認識。見ることによって生ずる認識。○意識…識知する心。

○首楞識動了別…［補2］。○了別…認識。区別して知ること。○嗚呼…ああ。嘆き、悲しみ、喜びなどに際して発する語。○見聞覚知…見ること、聞くこと、知覚すること、識知することの併称。六識のうち、眼識は見、耳識は聞、鼻識・舌識・身識は覚、意識は知に相当。ここでは、見根・聞根の略か。○慈恩唯識疏中、正法念経所説肉心為根…［補3］。○慈恩…慈恩大師基（六三二～六八二）のこと［補4］。○唯識疏…基撰述の『成唯識論述記』のこと。○正法念経…元魏・般若流支訳『正法念処経』のこと。○肉心…肉団心。心臓のこと。○自宗…法相宗のこと。○末那為根…［補5］。○正法念経違此応会〈云云〉…［補6］。○資中、以相如蓮花虫食人心為現量得…［補7］。○資中…唐代の資中弘沇（生没年不詳）のこと［補8］。○現量…直接知を得る過程と、ならびにその結果として得られる智。感覚器官と外界の事物の接触から生ずると考えられている。

［訳］次の文に云く、「根は清浄であるがゆえに、眼識も清浄である〈乃至〉、意識も清浄である〈已上〉」と。『首楞厳経』に「識は動じて認識する」と言っているのと同じである。ああ、悲しいことだ。宗密は分かっていないのだ、心体の見聞覚知を根とすることを。また慈恩『唯識疏』中の「『正法念経』の説く肉心を根とする」という文は、自宗（法相宗）の末那を根とする説と異なっている。それゆえに自ら、「〔『正法念経』は〈『成唯識論』の記述と〉矛盾するので、会通しよう〈云云〉」と言っているのだ。私の考えでは、基師は、この経にどのような解釈をしようというのか。また私の考えでは、資中は、姿が蓮花のようであり、虫が人の心を食らうことを、直接知覚によって得られたものであるとしている。

［補注］

1　次文云根清浄～意識清浄〈已上〉…『円覚経』「根清浄故、眼識清浄、識清浄故、聞塵清浄。聞清浄故、耳根清浄。根清浄故、耳識清浄。識清浄、故塵清浄。如是乃至鼻舌身意亦復如是」（大正蔵一七・九一四ｃ）とある。

2　首楞識動了別…『首楞厳経』巻三「如是識縁、因何所出。識動見澄、非和非合、聞聴覚知、亦復如是。不応識縁、無従自出。若此識心、本無所従、当知、了別見聞覚知、円満湛然、性非従所。兼彼虚空地水火風、均名七大、性真円融。皆如来蔵、本無生滅」（大正蔵一九・一一九ａ）とある。

3　慈恩唯識疏中、正法念経所説肉心為根…『成唯識論述記』巻一「次生心根。金七十論分別為体。有説、是肉心為体」（大正蔵四三・二五三ａ）とある「有説」を、覚晏は『正法念処経』が出典と記す。ただし、『正法念処経』には当該記述は見ら

れない。

4　慈恩…慈恩大師基（六三二～六八二）のこと。京兆府長安の尉遅氏。玄奘三蔵に学ぶ。大慈恩寺に住した。『成唯識論』を注釈して『成唯識論述記』『成唯識論掌中枢要』を著し、『瑜伽論略纂』『百法論疏』『因明大疏』『大乗法苑義林章』をはじめ、多くの著述がある。慈恩大師と尊称される。

5　末那為根…唐・遁倫集撰『瑜伽論記』巻十五「十二及一少分亦是能取者、謂六根六識及有縁法界。後明助伴。能取境意識、意識心所不依五根名独。能取理実亦仮。末那為根。助伴方取。六明界繫」（大正蔵四二・六五六ａ）とある。

6　正法念経、違此応会〈云云〉…『成唯識論』巻五の「此後随境立六識名、依五色根未自在説。若得自在諸根互用、一根発識縁一切境。但可随根無相濫失」（大正蔵三一・二六ａ）で議論されているのは、眼識などの六識の名称を、眼根などの根にもとづいて名づけるのは、眼根などが自在ではない（眼根では色境しか見られない）状態を前提とするものであり、修行が進んで「諸根互用」すなわち眼根で声を聞くことができるようになると、それは成り立たなくなる、と言ったことである。それに対して、基『成唯識論述記』巻五に「正法念経違此応会。蛇眼聞声是正量部、非大乗義。大乗不然、故不違也」（大正蔵四三・四一七ａ）とあるのは、『正法念処経』に、「瞿陀尼人、眼識聞声。如閻浮提中蛇虺之類、眼中聞声。瞿陀尼人。亦復如是」（〈須弥山の西にある〉瞿陀尼の人は、眼識が声を聞くという。あたかも閻浮提にいる蛇虺の類が、眼中に声を聞くようなものである）」とあることが、『成唯識論』の記述と矛盾するので、これから会通しようと述べている。基は、蛇の眼根が声を聞くことができる、というのは正量部の説であって大乗の説ではないから、矛盾はない、と会通している。

7　資中、以相如蓮花虫食人心為現量得…既出。

8　資中…唐代の資中弘沆のこと。既出。

⑮［原文］今加両釈。如害人時、若判余処、未必即死、若穿心前、乃速滅耳〈其一〉。若憂喜胸中独知。又以頂謂上、以足謂下、以胸謂中。自然任運、現量如是。又世人云、胸閉胸焦〈其二〉。此則鳩尾骨下、巨闕穴上、彼両際底、方寸肉団是也。又医家等説、五蔵之中、心蔵*其色赤矣。神住其中〈云々〉。観仏三昧経云、如来心相、如紅蓮花。妙紫金光、以為間錯。如琉璃筒懸在仏胸。不合不開、団円如心、万億化仏、遊仏心間〈云々〉。

［書き下し］今ま両釈を加う。人を害する時、若し余処を判てば、未だ必らずしも即ち死せざるに、若し心前を穿てば、乃ち速やかに滅するのみが如し〈其の一〉。憂喜の若きは、胸中独り知るのみ。又た頂を以って上と謂い、足を以って下と謂い、胸を以って中と謂う。自然任運なること、現量すること是の如し。又た世人云く、「胸開く」「胸焦る」と〈其の二〉。此れ則ち、鳩尾の骨の下、巨闕の穴の上、彼の両際の底、方寸の肉団是れなり。又た医家等に説く、「五蔵の中に、心臓*其の色赤なり。神も其の中に住す〈云々〉」と。『観仏三昧経』に云く、「如来の心相は、紅の蓮花の如し。妙なる紫金の光、以って間錯を為す。琉璃の筒の懸けて仏の胸に在るが如し。合せず、開かず、団円心の如く、万億の化仏、仏心の間に遊ぶ〈云々〉」と。

○自然任運…作為を加えず自ずとそうであること。○鳩尾骨下、巨闕穴上、彼両際底、方寸肉団是也…［補1］。○鳩尾…みぞおち。○方寸…一寸（約三㎝）四方。○医家等説、五蔵之中心蔵其色赤、神住其中〈云々〉…「蔵」は「臓」の略字［補2］。○神…霊魂。たましい。○観仏三昧経～遊仏心間…［補3］。○観仏三昧経…東晋の仏駄跋陀羅（三五九～四二九）訳『観仏三昧海経』のこと。仏の相好を観ずることが説かれる。また念仏三昧の功徳が記される。○紫金…紫磨金色。紫色を帯びた金色。仏の身体をいう。○間錯…まじわる。いりまじる。○琉璃…青色の宝珠。ここでは、ガラスの意であろうか。○団円…まるいこと。○化仏…衆生教化のために仏や菩薩が神通力により衆生の機根に応じた姿に身を変えた状態。

［訳］今二つの注釈を加える。たとえば人を殺害する時、もし〔胸先以外〕余処を切り開くのであれば、必らずしもすぐに死ぬわけではないが、胸先を穿ったなら、たちまち死ぬことになる〈その一〉。あるいは憂いや喜びは胸中に独り知る。また頂を上と謂い、足を下と謂い、胸を中と謂う。このように自ずとそうであることは、直接知覚によって知られる通りである。また世人は言う、「胸開く」「胸焦る」と〈その二〉。これは則ち、鳩尾（みぞおち）の骨の下で、大きく開いている穴の上にあり、〔みぞおちの〕両際の底にある、一寸（約三センチ）四方の肉団（心臓）のことである。また医家等に説く、「五蔵の中、心蔵の色は赤である。霊魂もそこに宿っている〈云々〉」と。『観仏三昧経』に言われる、「如来（仏）の心のすがたは、紅い蓮花のようであり、たえなる紫金の光が入り交じっている。琉璃の筒が仏の胸のところに掛かっているようなもので、合せず開かず、丸く心のようである。化生した万億の仏は、仏心のところを行き来している〈云々〉」と。

［補注］

1　鳩尾骨下、巨闕穴上、彼両際底、方寸肉団是也…浄土宗の良栄（理本、？～一四二八）『般舟讃私記見聞』に「〇心所託者、五蔵中心蔵、第六意識居住。故心根決疑章仏地房云、鳩尾下虚空上、有方寸肉団。此色法意根也已上」（浄全・七七三）として引かれる。

2　医家等説、五蔵之中心蔵其色赤、神住其中〈云々〉…『黄帝内経』『黄帝内経霊枢』巻八「五味第五十六」に「心色赤」とある。また、『太平御覧』巻三百六十に「韓詩外伝曰、惟天命本人情人有五蔵六府。何謂五蔵、情蔵於腎、神蔵於心、魂蔵於肝、魄蔵於肺、志蔵於脾」とある。

3　観仏三昧経～遊仏心間…『仏説観仏三昧海経』巻四「観相品」「如来心者如紅蓮華、金華映蔽、妙紫金光以為間錯、妙琉璃筒懸在仏胸、見仏身内万億化仏、是諸化仏遊仏心間」（大正蔵一五・六六五ｂ～ｃ）と、『仏説観仏三昧海経』巻四「観相品」「爾時、如来入解脱相三昧。令父王見、如琉璃窟、成真金像、真金像内。於仏胸中、如琉璃筒、従仏咽喉下、見如来心、如紅蓮華。金華映飾、紅華金光。不開不合、団円如心」（大正蔵一五・六六八ａ）の二つの文章が合わさったもの。『往生要集』巻中「如来心相如紅蓮華、妙紫金光以為間錯、如瑠璃筒、懸在仏胸、不合不開、団円如心。万億化仏、遊仏心間」（大正蔵八四・五四ｃ）とあるのも参考になる。

〈キーワード〉仏地房覚晏、心根決疑章、達磨宗、孤雲懐奘、首楞厳経、唯識